

● 本郷 峻 特定講師

Shun HONGO (Junior Associate Professor)

研究課題：地域住民と科学者の共同製作による熱帯雨林野生動物の持続的な狩猟システムの確立
(Sustainable hunting systems for rainforest wildlife through coproduction between local people and scientists)

専門分野：野生動物管理学、保全科学 (Wildlife Management, Conservation Science)

受入先部局：アジア・アフリカ地域研究研究科 (Graduate School of Asian and African Area Studies)

前職の機関名：京都大学アフリカ地域研究資料センター
(Center for African Area Studies, Kyoto University)



私は、おもに哺乳類を対象とした生態学と野生動物管理を専門とする、保全科学者です。これまでアフリカのコンゴ盆地熱帯雨林を舞台に、カメラトラップと統計モデリングを駆使したフィールド研究を行ってきました。熱帯雨林とそこで暮らす人々の両方にとって、野生動物は非常に重要な存在です。彼らの社会や生態の探究をとおして、野生動物の保全と地域住民の狩猟活動の両立を可能にするような手法の開発に携わっています。

世界の熱帯雨林では過剰な狩猟による野生動物の減少が深刻化しています。この「野生肉危機」が国際社会から環境課題として注目される一方で、厳しい保全策によって狩猟に根差した地域の生活と文化も危機に瀕しています。私の白眉プロジェクトでは、地域住民の経験と実践に基づく地域知と科学の協力によって、自給的狩猟と野生動物個体群の両方を維持するための地域主体型狩猟システムの開発に取り組みます。カメルーンやコロンビアの熟練狩猟者の専門知に学び、2つの知識体系間の対等な対話の実現を目指します。

I am a conservation scientist specialising in mammal ecology and wildlife management. Using camera traps and statistical modelling, I have been involved in field research in the Congo Basin rainforest. Wildlife is essential to both the rainforest and the people who live there. Through exploring their societies and ecology, I aim to develop methods to ensure compatibility between wildlife conservation and local hunting.

Overhunting in rainforests worldwide is leading to severe declines in wildlife. While the international community highlights this “wildmeat crisis” as an environmental challenge, local livelihoods and cultures rooted in wildlife hunting are also at risk after strict conservation measures. My Hakubi Project will work to develop a locally based hunting system to balance subsistence hunting and wildlife populations through equal collaboration between local knowledge—a knowledge system based on local experience and practice—and science. By learning from the expertise of skilled hunters in Cameroon and Colombia, I aim to achieve equal dialogues between the two knowledge systems.

森と人を支える野生動物

ダイカー、アグーチ、オナガザルといった熱帯雨林の野生動物は、食物連鎖や種子散布など様々な生態学的機能をとおして、豊かな森の維持に貢献しています。一方で、世界の熱帯雨林に暮らす16億の人々にとっては、野生動物の肉（野生肉）は必要不可欠なタンパク源と収入源であり、また、狩猟活動は数多くの住民の生業として、地域固有の社会規範や文化、そして世界観を育んでいます。すなわち、野生動物は森の生物多様性と地域コミュニティの文化多様性の両方を支えているのです。

野生肉危機

しかし、過去数十年の間に熱帯雨林における狩猟圧が急速に高まり、野生動物の減少が各地で報告されるようになってきました。この問題は「野生肉危機 wildmeat crisis」として国際社会の関心を集め、各国政府は保護区の設置と厳しい狩猟制限を進めました。その結果として、地域住民の自給的な狩猟活動までもが制限され、保全機関と住民との間に軋轢が生じています (Ingram et al. 2021)。

国際社会の価値観から捉えれば、野生肉危機は「生物多様性の損失」という環境課題だと見なすことができます。一方で地域社会の価値観を重視すれば、「熱帯雨林における生活と文化の存続危機」という社会課題として

捉えることもできます。したがって、保全機関と住民の軋轢は異なる価値観の間の摩擦と考えることができ、これは気候変動など多くの地球規模環境課題に共通する問題点です。

科学と地域知の不均衡を乗り越える

さらにこの軋轢の根底には、野生動物マネジメントをめぐる科学と地域知（地域住民の経験と実践に根差した知識）との間の不均衡と相互不理解があると考えられます。保全機関は国際社会の受容度の高さから、定量的な絶対指標など科学的根拠に基づく明示的な野生動物マネジメントを重視します。それと対照的に、熱帯雨林の熟練狩猟者らは長年の狩猟実践を通して得た野生動物に関する豊富な地域知に基づいて、より定性的で相対的な指標を用いた暗黙的な「マネジメント」を行ってきたはず

です。科学と地域知は実践においては共通点も多いのですが、根本的な志向性や思想に大きな隔たりがあるため、一方のみに基づくマネジメント・システムは、他方からは持続可能で公正だとはみなされません。野生肉危機の真の解決のためには、科学と地域知が現場での実践的研究を通じて相互理解を深め、住民の自給的狩猟活動を「野生動物保全に対する脅威」ではなく「保全の必須要素」として積極的に組み込んだ、地域主体型の狩猟マネジメントの構築が不可欠です。

狩猟活動に基づく野生動物資源量の指標

私はこれまでカメルーン東南部の熱帯雨林において、地域主体型マネジメントのモデルを開発するための長期フィールド研究を、カメラトラップ（野外に設置して野生動物の映像を自動的に記録するカメラ）と統計モデリングを主な研究道具として行ってきました。具体的には、地域住民の主な狩猟対象である地上性哺乳類の資源量（狩猟資源バイオマス）を、彼らの狩猟活動から予測できる指標を探索しています。この場合、よい予測指標とは、正確に狩猟資源バイオマスを予測できるだけでなく、狩猟活動の成果を用いて住民自身が計算できるようなシンプルなものであり、かつ住民の経験や知識と整合的でなくてはなりません。いくつかの指標をカメラトラップ調査と狩猟調査によって検討した結果、ダイカー比——ダイカー類（森林性アンテロップ）の捕獲頭数の種構成比（Yasuoka et al. 2015）——が、もっとも正確に狩猟資源バイオマスを

予測できるだけでなく、住民の認識ともよく合っていることがわかりました（Hongo et al. 2022）。

科学と地域知との共同製作研究へ

今後はこれまでの研究活動をさらに推し進め、カメルーンとコロンビアの熱帯雨林地域において科学と地域知の間の壁を壊す「共同製作研究 coproduction research」を行います。それによって、保全機関と地域住民との軋轢を解消し、自給的狩猟を軸に据えた狩猟マネジメント・システムの構築を目指します。科学者が研究の計画や実施、結果の評価を占有・先導してきた過去を反省し、熟練狩猟者をはじめとする「地域知専門家」と対等な対話を重ねることで、より公正で持続的なマネジメントを展望します。

Ingram et al. (2021) Wild meat is still on the menu: Progress in wild meat research, policy, and practice from 2002 to 2020. *Annual Review of Environment and Resources*. 46(1): 221–254.

Yasuoka et al. (2015) Changes in the composition of hunting catches in southeastern Cameroon: a promising approach for collaborative wildlife management between ecologists and local hunters. *Ecology and Society*. 20(4): 25.

Hongo et al. (2022) Predicting bushmeat biomass from species composition captured by camera traps: Implications for locally based wildlife monitoring. *Journal of Applied Ecology*. 59(10): 2567–2580.



図 1. カメラトラップに捕獲されたピーターズダイカー。



図 2. くくり罠に捕獲されたピーターズダイカー。